

タイと日本における集団意識とその育成の比較考察

—運動会（体育祭）を題材に—

シスワン マユリ

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

今日に至るまで各国の教育はその国、その地域の環境や社会の変化に伴って方針を変えてきた。授業を工夫するのはもちろん、特別活動という教科以外での学びの場を工夫するというのも重要である。本研究では、筆者のタイと日本における運動会の経験及びタイの学校における運動会で実際に起きている様々な問題をもとに、タイと日本の運動会における集団意識と集団意識が育成される過程について比較考察を行った。調査方法は、日本の中学校・高等学校・中高一貫校の運動会の練習・当日の様子を観察し、その後、両国の教員と生徒に半構造化インタビューを実施し、KJ法を用いて分析し、両国の比較考察を行った。その結果、タイと日本の教員の運動会に対する考え方や生徒への指導方法の違い、生徒同士の関係性の違い、運動会以外の学校行事の有無、生徒同士の関わり方の違いの4点に違いがあることを明らかにした。¹

キーワード：運動会（体育祭）、学校行事、集団意識、競争、競技

1. 問題の所在

1.1. タイにおける運動会について

タイの学校種は、教育制度によって、小学校と中高一貫校に分けられることが多い。タイの小学校の運動会は日本の多くの小学校と同様、小学1年生から小学6年生までが一緒に行く。タイの子どもたちは中高一貫校に入ると、中学生と高校生とで一緒に運動会を実施する。組分けの仕方は中学生から高校生までの学年をまたいで縦割りにし、ピンクや青や緑などの色に分けられる。実施種目はこの色別対抗で全て行われる。また、小中高だけではなく、タイでは大学においても運動会を実施しているところが少なくない²。大学内における運動会の場合は、学部対抗となる場合が多い。しかし中には、大学間対抗で他大学と運動会を実施するところもある。

このように、タイはどの教育段階においても、なんらかの形で運動会が実施されるため、タイ人にとって運動会は広く浸透している行事と言えよう。このような現状で本研究において筆者が着目したのは、タイの中高一貫校の運動会における生徒の集団意識と生徒たちの運動会に対する考え方や価値観である。

1.2. タイと日本の運動会を経験して筆者が感じた四つの違い

Mayuree SRISUWAN : The Comparative Study of the Group Consciousness and its Building Between Thailand and Japan - Focusing on the Sports Day - Graduate School of Education, Chiba University

筆者は実際にタイと日本における運動会を経験したことがある。日本の運動会を経験したのは小学生の頃であり、その後、中学生からタイに在籍していたため、タイの中高一貫校における運動会を6年間経験している。日本の学校に在籍していた時に経験した運動会は、これが運動会という行事なのだ当たり前のよう認識していたが、タイに帰国後、タイの運動会を初めて体験してカルチャーショックを受けた。同じ運動会と呼ばれる学校行事であっても、国が変わると様々なところで違和感を覚える場面があった。ここで、主に筆者の経験を元にして両国の運動会の違いが特に顕著である4つの事例を紹介する。なお、筆者がタイと日本で経験した運動会は学校種が異なっており、比較するには限界がある。筆者の経験から両国の運動会を一般化することは困難だが、本研究による調査によってタイと日本の運動会の違いをどこまで一般化することが可能かを明らかにしていきたい。

1.2.1. 生徒の運動会への関わり方の違い

筆者が日本の小学校の運動会に参加した際、個人種目やクラス対抗種目などの競技種目に関しては強制的に全員が参加する形であった。児童は運動会の練習期間から運動会当日にかけて何かしら決められた種目に参加しなければならない。この運営方法により、運動会に自分が参加しているのだとタイよりも強く感じられた。これは、中学校の運動会も同様であるといえよう。

タイの学校における運動会は、日本とは異なり、中学生の場合は強制的に参加させられる種目と自主的に参

加できる種目がある。タイのほとんどの学校では、高校生は全ての実施種目において自主的に参加することができるようになっている。

1.2.2. 運動会を終えた後のクラスの雰囲気の違い

筆者が日本の小学校の運動会を体験した中で、筆者のクラスに運動神経の良い人の多い年があった。クラス全員でリレーの練習を何度も積み重ねて当日を迎えた結果、クラス対抗リレーで優勝した。筆者はそれをクラスとして誇りに感じた。運動会を実施する前よりも運動会を終えた後の方がクラス全体の雰囲気は良くなり、筆者はクラスの一員として溶け込むことができたと感じた。

また、タイの中高一貫校の運動会を経験してみると、日本と比べて大きな違いを感じたところがあった。それは、運動会を終えた後のクラスの雰囲気が日本のように全体的に良くなったのではなく、クラスのあるグループのみが運動会を行う前よりも非常に親しくなった雰囲気があったことである。特に親しくなる傾向があるのは、特に運動会に貢献した生徒たちであり、同じ役割を持ったり、お互い運動会の準備期間中に多く関わりがあったりした生徒たちの間である。逆に運動会にそこまで意欲を持たず、他の生徒と比べて貢献することが少なかった生徒たちは、運動会に多く貢献した生徒たちと親しくなるようなことはなく、同じく貢献度が少なかった生徒同士が運動会を理由に親しくなることも少なかった。よって、運動会が終わった後のクラス全体の雰囲気がまとまるのではなく、むしろいくつかのグループに分かれてしまった。このように、タイと日本では運動会を終えた後のクラスの雰囲気に差異が見られた。

1.2.3. 目立つ役割及び注目される立場の違い

ここで筆者は競技及びスポーツ種目とパフォーマンス種目の2点に着目して例を挙げたい。

競技及びスポーツ種目に関しては、筆者が小学5年生だった際の日本の運動会には、クラス全員で参加するような綱引き、大縄跳び、玉入れなどの種目があった。このような種目は、誰か一人の実力を試しているのではなく、全員のチームとしての力を試しているため、参加者の中の誰かが特別に目立つようなことはない。しかし、クラス対抗リレーにおいては、クラスの中でも足が速い人がアンカーになることが多いため、その人たちは注目を集めることになるだろう。

一方タイでは、競技及びスポーツ種目に関して自主参加であるため、運動神経の良い生徒が集まる傾向がある。それぞれが自分の得意とする競技で目立つことができる。

パフォーマンス種目に関しては、日本の場合、開会式に全校生徒が入場行進をすることがあるが、タイでは開会

式で入場パレードが行われることが多い。中高一貫校の入場パレードは、各組が自分の組内で考えたコンセプトに沿って仮装をしたり、小道具を持ちながら歩いたりする。いわゆる仮装パレードというものに近い。タイの入場パレードは、お金がかかるようなドレスやタイ衣装、並びにヘアメイクに化粧といった本格的な仮装を生徒がすることが一般的である。基本的にパレードは生徒全員が参加することが多い種目だが、一部の生徒が仮装をし、残りの生徒は色別の体操着を着て歩く。仮装をする生徒は容姿に自信がある人がほとんどであり、教員や同じ組にいる友達から推薦されて仮装する人もいるが、ほとんどの場合は自主的に仮装する人が多い。また、入場パレードだけではなく、チアリーダーも同様に、男女問わず表現力や容姿に自信がある生徒たちが参加することが多い。タイはパフォーマンス種目に関しても生徒間で差異が見られるほど目立つ場と目立たない場がはっきり分かれている。さらに、目立ちたい生徒が多くいる場合は、生徒同士のもめごとや対立が生じやすい。

1.2.4. 運動会に使われる費用の違い

筆者が経験した限りでは、日本の運動会は、運動会のために子どもがお金を払うことはなかった。しかし、タイの運動会はそうではない。特に中高一貫校の運動会は、私立公立を問わず、お金を使う場面が多く見られる。

例えば、応援合戦という定番の種目がある。この種目は、スタンド席に座る生徒とスタンドの前に立つチアリーダーの両方が連携した応援パフォーマンスをするこのパフォーマンスに生徒はとて力を入れており、完成度を高めるために小道具や衣装に多くの費用を使う。ここで使われる費用の一部は、学校側が各組に予算を与えている。しかし、予算以上の費用を使う際は、生徒たちが自分たちで組内からお金を集める。

1.3. タイの運動会における問題

タイでは、2015年にOne 31チャンネルとGTH On Airチャンネルで放送された「青春期は毎日が大騒ぎシーズン3(筆者訳)」というテレビドラマがあった。作中のエピソードには、高校生たちが運動会の準備作業に取り組む中で、勝利を目的に多くのお金を使ってチアリーダーの衣装を買ったり、外部の人を雇って応援パフォーマンスの振り付けを教えてもらったりし、このようなお金の使い方に同意できない高校生の友達や後輩がお金を集める高校生と対立するシーンがあった。このエピソードが放送された後、多くのタイ人がこのエピソードに注目し、ネット上で話題となった。SNSでは、大人や子どもやウェブライターがそのドラマのエピソードに対し、多くの意見を投稿した。

さらに、2018年にはWorkpoint Newsというタイの

ニュース番組でも「運動会に高校生が10万パーツ（およそ30万円）もお金を使う」という話題が取り上げられた。これらの情報から最も多く取り上げられたタイの運動会における問題を例として3つ取り上げる。取り上げた運動会の問題は、運動会において過度な費用を使う生徒たちの問題、スポーツ種目よりパフォーマンス種目を重視、運動会の本来の目的と生徒の運動会に対する意味づけの相違である。なお、これらの情報からタイの社会全体でこれと同様の問題が生じていると判断することは難しいが、筆者の経験した学校以外にも同じような状況にある学校があることを確認しておきたい。

- (1) 運動会において過度なお金を使う生徒たちの問題
- (2) スポーツ種目よりパフォーマンス種目を重視する問題
- (3) 運動会の本来の目的と生徒の運動会に対する意味づけの相違の問題

以上で取り上げた3つの問題は、いずれも筆者がタイと日本の運動会を経験して感じた違いと対応している。

1.4. タイと日本における運動会の目的の比較

まず、タイの学習指導要領における運動会の記述に着目する。タイの運動会は、保健・体育科の中に含まれる一つの行事として位置づけられている。タイの教育省は、「学習指導要領（2008）」³で「中学生レベルの保健・体育科」の目的を9つ記述している。そのうちの2つが体育に関する目的であり、以下のように述べられている。

(A) 体育の活動、及び健康的な活動などを通して運動に親しみ、興味のある、または得意であるスポーツに定期的、積極的に参加する。

(B) 自主的に体育の活動に参加し、自分と他者の権利を尊重し、ルールやマナーに従い、スポーツマンシップとチームワークを大切に、目標を達成できる。⁴

また、「高校生レベルの保健・体育科」の目的は全部で7つあり、そのうち体育科に関する目的は3つあり、以下のように述べられている。

(C) これまで体育科の時間に習った運動スキルを発揮し、積極的かつ定期的に体育に関する活動に参加する。

(D) 責任感を持ち、ルールやマナー、並びに安全性に考慮し体育的行事や活動に参加し、スポーツを通して個人とチームの目標を達成できる。

(E) スポーツマンシップを持ち、スポーツの参加

や観賞をすることができる。⁵

以上のように、タイの運動会の目的を見てみると、タイでは生徒に「興味のある、または得意であるスポーツ」に自主的に参加させることや「これまで体育科の時間に習った運動スキル」を発揮させることを重視していることがわかる。

次に、日本の文部科学省が定める学習指導要領における運動会の記述に着目する。日本の運動会は、特別活動の一部と位置づけられており、特別活動の一部である学校行事に目的が記述されている。次期学習指導要領である『中学校学習指導要領（平成29年告示）』では、「第5章 特別活動」の第2の各活動・学校行事の目標及び内容に学校行事の目的を以下のように述べている⁶。

全校又は学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

また、次期学習指導要領である『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』の「第5章 特別活動」の第2の「各活動・学校行事の目標及び内容」で学校行事の目的を以下のように述べている⁷。

全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

以上のように、日本の運動会を見てみると、日本では生徒に学年や学校全体の「集団で協力し、よりよい学校生活」を築くことを重視していることがわかる。

このように、タイと日本では、運動会の目的から違いが見られたことが確認できた。

1.5. タイと日本における運動会に関する先行研究

ここでは、タイ及び日本の運動会に関する研究がどの程度行われてきたかを確認していく。まず、タイの先行研究から見ていく。

タイの運動会に関する研究はいくつか見られる。例えば、ランブンスック（2014）は、生徒の学力や特技を向上させるために、ほとんどの学校においては行事及び活動の1つに運動会を実施していると報告した。アモーンラタナーノン（2004）は、校長や体育科の教員を対象に運動会を実施する上で問題だと考えられる点は何かを調査した。いずれも結果は、運動会を実施する際

に利用する校内の設備に関する問題や運動会の計画・時間の配分などに関する問題などが多く取り上げられており、運動会を運営する教員側から見られる問題がほとんどであった。

では、生徒を対象とした運動会に関する研究はないのだろうか。筆者が調査した限りでは、生徒を対象とした研究は2つ見られた。

まず、1つ目は、カンブラコーン（1999）による中学生を対象とした研究であり、体育科のカリキュラムと運動会で実施されるプログラムとの関係性について満足度を統計的に調査した研究である。これは運動会におけるスポーツ種目のみに着目した研究であった。研究の結果は、体育科のカリキュラムと運動会で実施されるプログラムの両方とも満足度が高かったと報告されている。

2つ目は、シーカーウ他（2013）による調査研究であり、中高一貫校における運動会において、高校3年生の運動会に対する満足度を測る研究である。調査対象は高校3年生であり、調査方法は、生徒が運動会に参加した後、運動会に満足したかどうか、または不満に思ったことはあるかどうかについてアンケート調査を実施する方法である。アンケートの結果は、平均的に見てみると高校3年生は運動会にとっても満足しているとシーカーウらは報告した。

次に、日本の先行研究を見ていく。日本の運動会に関する先行研究は、直接運動会に着目した研究もあれば、特別活動または学校行事という大きな枠組みに着目した研究もある。

例えば、長谷川（2009）は、中学校の体育大会に着目し、調査研究を行った結果、生徒の一生懸命頑張ったという効用感が自己有能感と勤勉性とに有意な関連を持っていたことを報告した。また、学校行事としての運動会に着目した山田・藤田（1996）⁸は、体育祭や文化祭などといった競争的行事は、クラス対抗や学年対抗といった集団的枠組みの中で活動が実施されることが多く、「競争単位の編成様式が、生徒の活動への積極的な参加を促す基盤となり、またもう一方で、集団間の関係を調整する機能を果たしている」と報告している。また、河本（2014, 2015）⁹は、中学・高校時代に学校行事を体験した大学生を対象とし、学校行事に発達の意義があるかどうかを調査した。結果、学校行事は自身の成長に有用なものとして意味づけられていることが示唆されている。

このように、タイと日本の運動会に関する先行研究を見てきたが、タイの運動会に関する研究は、ほとんどスポーツに関する内容や運動会の実施内容への満足度を調査したものであり、あまり生徒同士の関係性や生徒の間で実際に起きている問題に関わる内容に触れていな

い。一方、日本は運動会に関する研究においては、生徒の精神面に関したり、生徒同士の関係性に関したり、いわゆる人間関係に関したりする内容が多く、研究者の様々な視点から学校行事または運動会の特徴や有用性などについてタイより幅広く研究が行われている。

1.6. タイと日本における運動会を比較考察する意義

タイと日本において運動会と呼ばれる同じ1つの学校行事でも実施形態などが全く異なることを確認してきた。両国の運動会の違いを国際的に比較することにより、両国の運動会の特徴をより浮き彫りにすることができると考える。運動会を国内レベルで研究することももちろん重要であり、意義のあることだが、他国との比較によってさらに違った視点から考察することで、新たな発見にも繋がり得るのではないだろうか。

特に、タイではこれまで運動会において様々な問題が起きているにもかかわらず、その問題を解決するための研究があまり行われてこなかったため、本研究においてタイと日本の比較研究を行うことは、タイの運動会における問題を解決するための手がかりを見つけ出す第一歩になることが期待できるであろう。

以上のことから、本研究においてタイと日本の運動会を比較することは意義があることだと考える。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

- ①タイと日本の運動会から見られる集団の特徴を明らかにすること。
- ②タイと日本の生徒における運動会に対する考え方及び意味づけが教員のどのような働きかけから影響されているのか、また、その他の要因はないかどうかを明らかにすること。
- ③タイの運動会における問題がどのような要因から影響されているかを明らかにし、それらの問題を解決するための方法を見出すこと。

2.2. 研究の方法

本研究の方法を述べる。まず、日本の中学校2校、高等学校1校、中高一貫校1校における運動会の練習や運動会当日の様子を観察し、記録する。そして、得られたデータを元に筆者の経験したタイの運動会の実際と第4章の研究協力校における運動会の情報を元に比較し、タイと日本における運動会の相違点と共通点を抽出する。

次に、タイの中高一貫校4校と日本の私立高等学校3校、公立中高一貫校1校の全4校を対象にし、学校現

場における教員や生徒に運動会について半構造化インタビューを実施し、KJ法¹⁰を用いて両国の比較考察を行う。

3. タイと日本における運動会の実際

3.1. タイと日本の運動会の比較

今回の観察を通して見出した日本の運動会の特徴と、タイの運動会の特徴を比較した結果、次の7つの観点において違いがあることがわかった。1つ目は、両国の練習時間の設定のされ方が異なっていること、2つ目は、運動会で実施される種目と組分けの方法に違いがあること、3つ目は、生徒の役割が異なっていること、4つ目は、生徒の性自認への配慮に違いがあること、5つ目は、生徒同士のコミュニケーションの取り方が異なった形で行われていること、6つ目は、優勝した際に与えられる賞及び景品に違いが見られたこと、7つ目は、運動会の練習の際や当日において他の組に対する生徒の振る舞い方が異なっていることである。なお、タイの運動会の特徴は、筆者の母国での経験による。また、インタビュー協力校でのインタビュー結果も含めて比較を行った。

以上の理由から、「練習時間の設定」、「実施種目と組分けの方法」、「役割・立場」、「生徒の性自認への配慮」、「生徒同士のコミュニケーション構造」、「賞・景品」、そして「生徒の他組に対する振る舞い方」の7つの観点を挙げて両国の運動会を比較していく。

3.2. タイと日本の運動会の特徴

ここでは、3.1で述べた7つの項目に沿って両国の運動会の特徴を述べる。

1つ目の「練習時間の設定」について述べる。タイの場合は、多くの学校において授業時間を短縮し、運動会の練習時間を作ることがある点の特徴である。日本の場合は、タイのように授業時間を短縮して運動会の練習時間を作る学校もあれば、体育の授業時間を利用して生徒に運動会の練習を行わせる学校もあり、学校によって練習時間の設定が異なる点の特徴である。また、両国とも授業の時間以外に生徒が競技やパフォーマンスの練習をする学校があることがわかった。

2つ目の「実施種目と組分けの方法」について述べる。実施種目に関しては、タイでは、日本のようなクラスで参加するような種目がないこと、スポーツ種目はスポーツが得意な生徒が自主的に参加する種目となっていることが特徴的だと言える。一方、日本では実施種目の参加対象となっている生徒は必ずその種目に参加しなくてはならないこと、クラス全員で参加するような種目が多くあることが特徴的である。

また、組分けに関しては、タイでは各学年のクラス数が多少異なっているが学年をまたいだ縦割りで組を分けることが特徴的であり、日本の場合は各学年のクラス数が異なっている場合は縦割りに組分けをしないことが多い点の特徴であろう。

3つ目の「役割・立場」について述べる。この点に関して、両国の間に非常に重要な点だと見られる違いが見られた。それは、運動会のリーダーとなる生徒の役割が異なっている点である。タイの場合は、組のリーダーとなる生徒は、組内の運営のみを担うという特徴がある。一方、日本の場合は、実行委員となる生徒は、組内の運営だけでなく、他の組の実行委員と話し合いながら運動会を作り上げる役割を担っているという特徴がある。このようなタイと日本の運動会のリーダーを担う生徒の役割の違いは、5つ目の「コミュニケーション構造」の観点から比較した際にも見られた。

4つ目の「生徒の性自認への配慮」について述べる。タイと日本では、運動会において特別に生徒の性自認への配慮をしていることはなかった。しかし、タイでは生徒が自主的に様々な実施種目に参加することができ、生徒が仮装をすることや化粧をすることは禁じられていないため、LGBTの生徒たちは自由な発想や表現ができる場を設けられているという点の特徴的だと言えるであろう。一方、日本では男子生徒は男子が参加対象の種目に必ず参加しなくてはならないように、ほとんどの実施種目において参加対象の生徒は種目への参加を強制される。また、運動会において生徒が仮装をしたり、化粧をしたりすることがない（もしくは禁じられている）ため、生徒たちは自認する性を運動会において表現する場がタイと比較して少ないのではないだろうかと考える。

5つ目の「コミュニケーション構造」について述べる。この点に関しては、3つ目の「役割・立場」で述べた内容と関連する。タイの場合は、組のリーダーは組内の運営のみを担う。従って、組のリーダーは他の組のリーダーと関わるようなことはなく、運動会を運営するにおいて組内のメンバーとコミュニケーションを取ることがほとんどであることが特徴的だと言える。一方、日本の場合は、実行委員となる生徒は組内の運営だけでなく、他の組の実行委員とも話し合いながら運動会を作り上げる役割を担っていることが特徴である。従って、実行委員は組内のメンバーとコミュニケーションを取ることもあり、他の組の実行委員とコミュニケーションを取ることもあることが特徴的だと言えよう。

6つ目の「賞・景品」について述べる。タイでは、スポーツ種目に参加し、優勝した生徒に金・銀・銅などのメダルを授与することに特徴があり、日本では、クラスまたは組に表彰状を授与することに特徴がある。また、

両国ではトロフィーを生徒に授与することが共通点として見られる。このようにタイと日本ではそれぞれ特徴だと言える点や共通点を確認できたが、賞や景品の内容に大きな違いは見られなかった。

そして 7 つ目の「他組に対する行為」について述べる。この点に関しては、筆者が日本の運動会を観察してきた中でも最もタイと日本の違いが大きく見られた点である。筆者が観察した日本の学校種は中学校、高等学校、中高一貫校などと様々だったが、どの学校においても組が一緒であろうと別々であろうと、生徒たちはお互いに会話をしていたため、このような生徒の他組に対する行為は日本の運動会における 1 つの特徴だと言えるであろう。一方、タイではこのような生徒の様子はあまり見られず、さらには、お互いに必死に自分の組のパフォーマンスを隠そうとする行為がよく見られるため、このような生徒の他組に対する行為はタイの運動会における特徴だと言える。

以上が、タイと日本の運動会における特徴である。両国ではなぜこのような違いが見られるかをインタビュー調査の結果も踏まえて考察していきたい。

4. インタビューの結果と考察

4.1. 調査手続

タイの研究協力者には、2018 年 8 月上旬から 8 月下旬にかけ、日本の研究協力者には、2018 年 9 月下旬から 10 月下旬にかけて半構造化インタビューを行った。調査は両国同様、各学校を訪問し、休み時間や放課後の時間に研究協力者である教員が予約を取った校内の会議室または相談室を利用し、1 対 1 で行った。インタビューのテーマは「タイと日本における生徒の運動会に対する意味づけができるまで」であり、筆者はテーマに沿っていくつかの質問項目を用意した。主な質問項目は、対象者の立場や役割によって異なる。インタビューの内容は研究協力者の許可を得て IC レコーダーに録音し、全て日本語に文字化した。

4.2. 分析方法

インタビューの内容は、KJ 法図解化 (A 型)・叙述化 (B 型) を用いて分析した。具体的な手続きとしては、まず、タイと日本に分けてインタビュー調査で得られた情報を文字化し、文字化したデータを元に類似性の高いもの同士をカテゴリー別に小グループ化する。さらに、類似する部分や共通する部分がある小グループを集め、大きいグループにまとめる。また、グループ間の相互関係を見出すためにグループ同士の空間配置を試行し、国別及び対象別に全体構造を図解化及び叙述化する。

4.3. 調査結果

調査結果の表示の仕方は、まず、類似するデータのまとまりを表す見出しを記述し、見出しに番号を振り、四角で囲む。(例：1 運動会の○○) また、それぞれの小グループに該当する発言をその下に示す。対象者の発言で単語が省略されていたり、説明文が足りていなかったりする場合は筆者が () の中に言葉を付け足したり、脚注を付けたりしてわかりやすくする。そして、各発言の文末に対象者のコードを () に振る。

4.4. 考察

タイと日本における教員生徒へのインタビューから得られた要素を小グループ化した結果、タイにおける教員は 1~38 番の 38 の小グループ、日本における教員は、39~62 番の 24 の小グループができ、タイにおける生徒は、63~103 番の 41 の小グループ、日本における生徒は、104~122 番の 19 の小グループができた。そして、類似する部分や共通する部分がある小グループを統合して中グループ化し、それぞれの関係を図で表した。

4.4.1. 両国の運動会における教員の考え及び指導方法の比較考察

タイと日本の教員の考え方には、大きく 2 つの違いが見られる。

1 つ目は、競争に対する考え方の違いについてである。インタビューにおいて、「学校を卒業して一般の社会人になった時、世間の競争性が高い状況からは逃れられないし、あつて当たり前ものだからそれを今のうちに知っておいて、立ち向かうことができるようになって欲しい」と発言した教員がいた。この発言から、タイの教員は、7 競争性の高い状況はあつて当たり前のことだと考えていることがわかる。教員はこのような考えから、運動会を社会人になる前の模擬練習の場に位置付けて生徒たちに競争させているのである。運動会の目的は、2 体育科の授業の成果を發揮させること 4 運営能力を身につけさせること 3 チームワークを學習させることがあり、教員は生徒たちが競争する状況において、いかに自身の実力や特技を發揮できるか、また、スポーツチーム及び組を運営する生徒がいかに組のチームワークを高めることができるかなどを重視している。

一方、日本の教員は 43 生徒全員が楽しめる運動会にしたいという教員の願望を抱いている。この願望は、日本の教員の「競争が激しくなると、運動が得意な子とはにかく、苦手な子にとっては辛いので (中略) みんなが楽しめるようなものを作っていく」という発言等から伺える。このような願望を有しているため、教員は 50 生徒全員が楽しめるための工夫をする行為を取ったり、

騎馬戦や棒倒しなど **52** 競争性が高くなるものへの拒否をしたりしている。また、騎馬戦や棒倒しなどの種目は、生徒同士の接触により、怪我や事故が生じる恐れが高いため、生徒の **51** 安全面を第一に配慮して、それらの種目を実施していない学校もある。

2つ目は、生徒同士の関わり方、すなわち生徒の人間関係に関する考え方の違いについてである。タイの教員は、高校生の生徒たちが組内の人間関係を構築する過程で、生徒が組内の **5** 人との対立は当たり前だという考えを持っている。このような考えは、タイの教員の「(生徒同士の付き合いの中で)対立したり喧嘩をしたりすることだって当然ある」という発言等から伺える。インタビューを行った教員の一人が「運動会を通して多様な人との付き合いは難しいところもある、それが現実」と発言していることからタイの教員は生徒に人間関係を構築する上での問題を自ら乗り越えて欲しいという願望を有していることがわかる。

そのため、教員は生徒同士の間で起こる対立や喧嘩をあらかじめ防ぐ行為は取らず、生徒に **13** 対立や問題と立ち向かわせる姿勢を取ったり、**14** 対立や問題が起きるのは当たり前と説得する指導を行ったり、生徒に **20** 対立させる場を作り、そこに教員も加わるような行為を取っている。

一方、日本の教員は、**44** クラスが仲良くなっただけの願望を抱いている。この願望は運動会の目的の **41** クラスの団結を深めることに反映されている。また、クラスを仲良く深めるには、**40** 協調性を学習させることが必要であるため、協調性を学ぶことも運動会の目的とされている。インタビューにおける日本の教員の「考えが違う人間がいるのはもちろんなんですけれども、そういう中でお互いが協力し合う」こと、「自分はそこまで参加したいとは思わないけど、まあ付き合いあってあげるかという気持ち」といった発言から、教員が言う「協調性」とは、生徒が他人のために貢献または協力すること、考え方が異なる人の中で、お互いの意見がある程度抑えて話し合ったり協力したりすることを意味していると考えられる。

そのため、教員は生徒に **48** 集団に協力するように説得する行為を取ることがある。つまり、生徒同士の意見対立や喧嘩などをできるだけ起こさないようにするという意味が含まれているのであろう。さらに、日本の教員は生徒に **42** 他のクラスと切磋琢磨をさせることを目的としている。このことは日本の教員の「競技をやっていく上で、相手をやっつけるっていうのではなくて、9クラスあったら9クラスがお互い切磋琢磨をして自己を成長させていく」という発言から読み取ることができる。

以上より、タイと日本は教員の運動会に対する考え方

や生徒の指導方法に違いがあることがわかった。これらの教員の考え方や指導方法は、運動会は自分の実力と特技を発揮する行事であるというタイの生徒の認識、運動会は学校全体で楽しむ行事であるという日本の生徒の認識に影響を与えているのであろう。

4.4.2. 両国の運動会における生徒の考え方及び行為の比較考察

4.4.2.1. 生徒同士の関係性の違い

タイの運動会は中学生と高校生の中にヒエラルキー、すなわち高校生が中学生の上位に位置付く階層的な関係性ができている。**74** 高校生主導で中学生は **66** 高校生に従うという高校生と中学生の関係ができていることがわかる。また、小学校の時とは異なって **69** 組への達成感を中学生や高校生は感じていることも読み取れる。

高校生は、運動会において **80** 他者に実力を見せたい願望を抱いたり、**81** 生徒のプレッシャーを感じたりしている。それは「(他の組が)もう作業し始めているとか、何か隠して準備を進めているのとか知ると、なんかすごい作る気だな(と感じる)」、「(他の組が運動会の準備作業を早く進めていると)ものすごく手強い相手だ(と思う)」などの発言から読み取ることができる。この願望やプレッシャーの影響から、生徒によっては組のパフォーマンスの完成度を高めるために **85** 後輩に対する協調的な行為を取ることがある。このことは、「後輩が協力してくれるように説得する」、「叱ったり怒鳴ったりするときと練習も嫌がるだろうと思ってなるべく怒鳴らないように(する)」などの発言から伺える。一方で、「後輩にもっと本気を出してもらいたくて、怒鳴ったり、イライラした顔つきで話しかけたり(する)」と話したタイの生徒がいたことから、**86** 後輩に対する強制的な行為を取る生徒もいると言える。そして、このような高校生の行為に対し、中学生は、**70** 先輩への理解 **71** 先輩への憧れ **72** 先輩への不理解 **73** 先輩への不満など、個々の生徒が先輩に対する様々な印象を持ち始めるのである。

一方、日本の運動会には、タイのような階層的な生徒の関係性は見られない。日本では、中学校の場合、**109** 教員の指導も加わる生徒主導で運動会を運営しており、高等学校の場合は **111** 生徒主導で運動会を運営している。また、日本の中学生と高校生は、運動が苦手な生徒に対する配慮をしたり、応援パフォーマンスのように練習時間を多く必要とする種目には、学校が設けた運動会の練習時間外に生徒を強制的に呼び集めて練習させるような行為を避けたりするなど、生徒が気持ちよく **114** 全員参加できるような配慮を共通意識として持っている。

4.4.2.2. 運動会以外の学校行事の有無

タイの高校生たちは、運動会を「76 人生に一度だけしかない唯一の行事」だと感じている。なぜなら、毎年行われる運動会において、唯一組のリーダーとなって自由に組を運営できるのは、高校2年及び高校3年生であるからだ。生徒たちは運動会で、「77 自由な発想・表現を活かせる機会」を与えられている。ここでいう「自由な発想・表現を活かせる機会」とは、入場パレードや応援パフォーマンスなど、生徒が創造性をはたらかせて実施する種目を指している。また、生徒は、「運動会は他の行事よりも細かい作業が多い」、「多様なアクティビティが詰まっている」など運動会は「78 作業量の多さ・多様な活動」だと発言している。また、生徒は「他の行事は単に展示会とかイベント的だからーい感じなんですけど、運動会ではそんなのないない」と発言しており、この発言から運動会は学校生活において最も規模が大きく、競争性を有する唯一の行事であると生徒が認識していることがわかる。

また、生徒たちが運動会を「人生に一度だけしかない」と捉えている背景には、他にも先に述べた「生徒同士の関係性」が関わっていると考えられる。タイの生徒の間では階層的な高校生と中学生の関係性ができており、中学生が高校生に憧れたり、高校生に命令されて不満を持ったりしている。中学生は、自分たちのやりたいように活動できない立場に位置付けられている。そのため、中学生は高校生になると、運動会を人生で唯一の自分たちがやりたい活動をできる機会として認識するのである。そして、高校生になり、リーダーの役割を担った生徒は、「82 先輩の気持ちが理解できた」と共感するのである。高校生にとって、運動会は学校生活の中で一度だけ訪れ、自分たちのやりたいことを存分にできる機会なのである。そのため、高校生と中学生の間の階層的な関係性からも影響を受け、高校生は、運動会を人生で一度しかないというほど意味のある行事だと認識しているであろう。

一方、日本の生徒は、タイの生徒のように運動会に「人生に一度だけしかない」という特別な意味づけをしていない。また、日本の生徒たちは、インタビュー調査で運動会について様々な意見を述べる際に、運動会以外の「122 その他の学校行事」について言及することが多かった。例えば、文化祭、球技大会（スポーツ大会）、合唱コンクールなどである。生徒は、「クラスで仲良くなったのは文化祭とかだったかな」や「球技大会とかだと、やっぱりクラス内で仲が良くなるのがすごい多いと思います」などと発言していた。生徒が取り上げた運動会以外の行事はいずれも学校全体が実施する行事である。また、運動会以外の学校行事において、生徒はクラ

ス単位で参加することになっている。

このように、どの行事においてもクラスの集団を形成することが基盤となっており、日本の生徒たちは、個人によってどの行事に力を入れるかは異なる。よって、運動が得意な生徒が多いクラスは運動会に力を入れたり、歌が上手な生徒が多いクラスは合唱コンクールに力を入れたりとクラスの特徴によってどの行事に力を入れるかは異なるのである。また、学校全体で実施する大規模な行事の数や種類も豊富であるため、日本には運動会を「人生に一度だけしかない」と捉える生徒がタイに比べて数少ないと考えられる。

さらには、タイのように階層的な関係性が生徒の間できていないため、中学生が高校生になって運動会のリーダーになるのを待つようなことがないのである。よって、日本の生徒たちは、タイの生徒たちのように運動会が生徒の人生における最大の行事だと認識することは少ないのである。

4.4.2.3. 生徒同士の関わり方の違い

ここで筆者が着目したい「生徒同士の関わり方」とは、運動会における生徒の競争相手となる他の組、または他のクラスの生徒とどのような関わり方をしているかについてである。

タイの場合は、運動会において全て組対抗式で競い合っているため、競争相手は自分とは異なる組となる。生徒たちは、他の組に対し、「90 他組の中で関わる事ができる・できない組がいる」「91 他組が関わってきたら関わる」「92 他組と関わろうと思えば関われる」「93 他組と関わろうとしない」「94 他組から敵対心を持たれる」「95 他組を疑う・他組に疑われる」などといった様々な関わり方をしている。「90 他組の中で関わる事ができる・できない組がいる」「91 他組が関わってきたら関わる」「92 他組と関わろうと思えば関われる」はいずれも異なる組同士の生徒が積極的に関わり合いを持つようとしていないことを示している。「93 他組と関わろうとしない」「94 他組から敵対心を持たれる」「95 他組を疑う・他組に疑われる」からは、生徒が他の組と関わらないだけではなく、他の組をライバルとして見て敵対心を持っていることがわかる。

また、タイの生徒たちは、他の組に対し、自分たちがどのようなパフォーマンスの練習や準備作業を進めているかを隠そうとする「96 非公開的な行為」を取っている。しかも、この隠す行為が、他の組からすると相手の組が自分たちの予想を超えたパフォーマンスを作り上げようとしていると感じるため、それが「81 生徒の自尊感情」につながっているのである。さらには、運動会当日まで、相手にはパフォーマンスを見せたくないという生徒の思いが強すぎると、自分の組が必死に隠してい

るものを他の組が見ようとしたり、探ろうとしたりしてないかと生徒は他組を警戒するため、**95 他組を疑う・他組に疑われる行為**が見られるのである。

しかし、日本の運動会ではタイのように生徒が相手に敵対心を持つような行為が見られなかった。日本の生徒たちは、組やクラスが異なるか否かに関係なく、**116 お互い関わり合おうとする行為**が見られる。この「お互い」というのは、運動会を運営する実行委員同士をはじめ、過去に同じクラスにいた生徒同士、同じ部活動に所属している生徒同士など、もともと関わりがある生徒同士の間柄を指している。また、この他にも、運動会で同じ競技に出て初めて知り合った他のクラスの生徒や自分と同じ部活動にいる生徒を通して初めて知り合った生徒など、運動会をきっかけに初めて関わり合った生徒同士の関係が構築されることもある。

さらに、日本の生徒たちは、「一生懸命に走るっていうことが一人ひとりあって、誰かに勝つっていうのはその次」、「(他のクラスに) 負けないぞっていうよりは、自分たちは自分たちで頑張るぞって感じの方が強い」と発言しており、誰かに勝つという行為よりも**113 お互い切磋琢磨する行為**を重視している。

このようにタイと日本の生徒を比較して見ると、いかに日本の生徒たちがタイの生徒たちよりも競争意識が低く、他の組またはクラスに敵対心を持つことがあまり見られないことが分かるであろう。また、日本の運動会における生徒たちの競争意識が低いことと、競争相手に敵対心を持たないことから、日本の生徒の間では、タイの生徒のように相手から何かを隠そうという意識はないのである。そのため、日本の生徒たちは他の組に対して**117 公開的な行為**を取っているのである。

5. 研究の成果と今後の課題

本研究では、タイと日本の運動会における集団意識とその育成の比較考察を行った。また、両国共に首都圏における学校を対象とし、それぞれ4校から得られた情報を分析及び考察した。そのため、本研究から両国の運動会の特徴を一般化するには限界がある。今後は、首都圏並びに地方の学校も対象にし、さらに検討する余地があると考えられる。ここで、本研究の目的である①～③まで1つずつ確認し、考察をする。

1つ目の目的は、タイと日本の運動会から見られる集団の特徴を明らかにすることである。タイの運動会に見られる集団には、中学生と高校生の中にヒエラルキー(階層的な関係性)ができていく特徴があることが考えられる。一方、日本の運動会に見られる集団に、生徒間でヒエラルキーが形成されず、ほとんどの生徒が組よりもクラスの所属意識を持つ特徴がある。以上のような両

国の違いは、日本の運動会では、学年種目のようなそれぞれの学年の中で競う種目が多く、生徒が他の学年と関わる機会がタイの運動会に比べて少ないことによって生じると考えられる。よって、日本の運動会ではタイのように生徒の間にヒエラルキーが見られないのであろう。

2つ目の目的は、タイと日本の生徒における運動会に対する考え方及び意味づけが教員のどのような働きかけから影響されているのか、また、その他の要因はないかどうかを明らかにすることである。この点に関しては、両国のインタビュー調査及び分析から「タイと日本の教員における運動会に関する考え方及び指導方法」、「生徒同士の関係性」、「運動会以外の学校行事の有無」の3つから影響を受けていることがわかった。

しかし、本研究ではタイと日本の学校における運動会以外の行事や活動をはじめ、教員や生徒の日頃の学校生活が、運動会にどのような影響を与えているかを深く掘り下げる段階まで至らなかったことが課題として残っている。生徒の運動会に対する意味づけは、先述した要因以外からも影響を受けている可能性がある。

3つ目の目的は、タイの運動会における問題がどのような要因から影響されているかを明らかにし、それらの問題を解決するための方法を見出すことである。この点に関しては、2つ目の目的で明らかになったことと関連している。タイの運動会における問題は、生徒が入場パレードや応援パフォーマンスで衣装や飾り付けなどを作ることに過度なお金を使う問題や生徒が教員の定めた種目の評価基準及びルールを無視する問題などが挙げられる。

これらの問題は、3つの要因から影響を受けて生じている。第1の要因は、教員が生徒に競争させる場を作っていることである。第2の要因は、中学生と高校生が一緒になって組対抗式で競うため、中学生をリードする高校生と高校生に従う中学生の間でヒエラルキーができてしまっていることである。第3の要因は、運動会がタイの多くの学校において生徒全員が参加し、競い合うという年に1回訪れる大規模な行事となっており、これが他の行事にはあまり見られないことである。そのため、特に各組を運営する高校生の生徒たちは、リーダーになれるこの1度だけの機会に力を入れるのが当前となるのである。よって、競争性の高い状況に置かれた生徒たちは、ありとあらゆる方法を使って自分たちの実力を発揮し、他者から認められるために必死になる。これに伴い、タイの運動会では前述した様々な問題が生じるのである。

本研究では、タイの運動会における問題がどのような要因から影響されているかを把握することはできたものの、具体的な改善策を提案するまでには至らなかった

ことが課題として残っている。すでに、タイのいくつかの学校では、教員が種目の評価基準を改善したり、新しいルールや規則を追加したりして、ある程度問題を減少することに成功している。しかし、このような改善方法は問題を解決するための効果的な方法だとは言えない。なぜなら、タイの教員は、種目の評価基準・ルール、生徒による費用の問題などを解決するための規則や条件づくりなど様々な方法を用いても、生徒はそれに囚われず自分がやりたいように行動することがあるからである。また、このような方法は生徒同士の関係性をより良くする方向へは向かっていない。問題を解決すると同時に生徒同士の関係性をより良くしていくためには、まず日本の運動会で見られるようなクラスの生徒全員が関わり合うことができる種目を取り入れることが必要ではないかと考える。これは、日本の運動会とタイの運動会を比較した結果よりわかったことである。従って、生徒同士のより良い人間関係を構築していくには、教員や生徒の日頃の学校生活から見直していく必要があると考えられる。

日本ではクラスをはじめとする生徒同士の人間関係をより良くするための学校行事がタイと比べて多くある。また、クラス内だけでなく、生徒は他のクラスの生徒と関わり合う機会が部活動にある。つまり、日本の運動会において生徒が良好な関係を構築することができる背景には、運動会以外の学校行事や活動、日頃の学校生活などを通して、日々積み重ねてきた関係性が存在すると言える。

一方、タイでは本研究からも明らかになったように、クラス全員が参加するような学校行事は日本と比べて少ない。また、日本のように生徒が他のクラスの生徒と人間関係を構築する機会となる部活動は盛んに行われていない。そのため、タイの生徒の人間関係をより良くし、その関係を維持していくためには、上記で提案したように運動会でクラスの生徒同士がより良い関係性を構築していくための機会を教員が作る事が重要だと考える。また、運動会以外の学校行事や活動でもこのような機会を生徒に与えるためにも今後はそれらを見直して改善していく必要があると考える。

1 本論文は、筆者の平成 30 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文を再構成したものである。

2 Dek-D 公式ホームページ

3 教育省 (2008) 「学習指導要領 (2008)」

4 タイ語から日本語に筆者が訳したものである。

5 タイ語から日本語に筆者が訳したものである。

6 文部科学省 (2017)、p.162

7 文部科学省 (2018)、pp.647-648

8 山田 真紀・藤田 英典 (1996)、pp. 161-174

9 河本愛子 (2014)、河本愛子 (2015)

10 川喜田二郎 (1986)

引用文献

- アモーンラタナーノン (2004) 「バンコク都内の中高一貫校における運動会に関する調査研究」カセサート大学
<http://dric.nrct.go.th/Search/ShowFulltext/1/145327> (最終閲覧 2018.12.19)
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法一渾沌をして語らしめる』中央公論社
- カンブラコーン (1999) 「体育科のカリキュラムと運動会の実施プログラムの関係性に関する満足度の調査研究:中学生を対象に」コンケン大学
<http://dric.nrct.go.th/Search/SearchDetail/89944> (最終閲覧 2018.12.18)
- 教育省 (2008) 「学習指導要領 (2008)」
http://lib.edu.chula.ac.th/FILEROOM/CABCUC_PAMPH/ELT/DRAWER01/GENERAL/00000/00000218.PDF (最終閲覧 2018.10.11)
- 河本愛子 (2014) 「中学・高校における学校行事体験の発達の意義: 大学生の回顧的意味づけに着目して」『発達心理学研究』、第 25 巻、第 4 号、pp.453-465
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjdp/25/4/25_453/_pdf/-char/ja (最終閲覧 2018.11.03)
- 河本愛子 (2015) 「中高一貫校における学校行事の集団社会化理論に基づく質的検討—生徒に対する教員の関わり方に着目して—」、日本教育心理学会総会発表論文集『第 57 回総会発表論文集』、p.581
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pamjaep/57/0/57_581/_pdf/-char/ja (最終閲覧 2018.11.03)
- シーカーウ (2013) 「運動会への参加に関する満足度の調査研究: ヤソトンピタヤーコム学校における高校 3 年生を対象に」ヤソトンピタヤーコム学校
<http://mbcenterentainmen.blogspot.com/2014/02/is-1-67.html> (最終閲覧 2018.10.02)
- 長谷川祐介 (2009) 「家庭背景別にみた学校行事の教育的意義—体育大会を事例に—」『比治山大学現代文化学部紀要』第 16 号、pp.135-144
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hijiyama-u/detail/836920140122094602> (最終閲覧 2018.11.02)
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』東山書房
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示)』、pp.647-648
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf (最終閲覧 2018.12.2)
- 山田真紀・藤田英典 (1996) 「学校行事における活動の編成形態—活動の公開性/非公開性と競争性/共同性に注目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 36 巻、pp.161-174
- ランブンスック (2014) 「生徒のアイデンティティを育成する指導について: 学校の事例を参考に」チュラーロンコーン大学
<https://cuir.car.chula.ac.th/bitstream/123456789/46484/1/5483844827.pdf> (最終閲覧 2018.12.18)
- Dek-D 公式ホームページ
<https://www.dek-d.com/board/view/2730744/> (最終閲覧 2018.11.10)

謝辞

研究を進める上で、タイと日本の運動会の観察や運動会に関するインタビュー調査にご協力いただいた学校の先生方々や生徒達に心より感謝申し上げます。